

第11号

執筆者

35人

@短信

大川 聡子 新連載

皆様はじめまして。修士・博士でご指導いただいた先生方と同じ媒体に連載をさせていただくなんて、恐れ多くてなかなか原稿が進まず、新連載なのに締め切り間際になってしまいました。

今から10年前に市役所退職 立命館大学大学院応用人間科学研究科入学 看護系大学助手 修士修了 結婚 社会学研究科博士後期課程に入学 長男出産 次男出産 博士修了という、あまり一般的ではない経歴をたどっており、自分の人生自体が複雑経路だなと感じています。私がテーマとしている10代の母親も、教育を受けるべき年齢と多くの人が思っている時期に出産という、ライフサイクルが交錯する存在です。でも、学ぶことも、働くことも、結婚するかもしれないかも、子どもを持つか持たないかも、その人それぞれの価値観で、その時ベストだと思う選択をされていると思います。そうした個々人の価値観や選択を尊重し、多様なライフサイクル選択が受け入れられる社会のあり方について、連載を通して考えていきたいと思えます。

浅田 英輔 新連載

青森県の弘前児童相談所で児童心理司をしております。児相に勤めて12年

になりますが、入庁したころに始まった「弘前家族支援研究会」での団先生のワークショップに参加しております。11月にもそのワークショップがあったのですが、その時に「なんか書け」というお言葉を頂きまして、「これなら続けてかけるかも」と思えることで提案してみました。

ちょっと異色かなーとは思いましたが、でも知っておいて欲しいよなーっていうことを書き続けてみます。

相談援助に関わってる人って、電脳に疎かたりしませんか？そこをちょっとお手伝いします！

普段は、相談にきた親御さんや子どもさんとの面接のほか、施設職員対象の継続的な研修会をやったりしています。集団を扱うことが楽しいなあと思っているところです。

大谷 多加志

8月から連載を開始しました。職場で携わっている「新版K式発達検査」を軸に、「発達」や「研修」を切り口に連載を続けていきたいと思っています。

京都で合計136回開催されてきた新版K式発達検査の講習会を、9月8日・9日に初めて福島県で開催しました。講師の先生の「被災地で何かできることはないか」という思いが原点となり、半年前から準備して開催にこぎつけました。知人から「福島では子どもの発達を考える余裕なんてない。放射能からどう守るかが今一番重要だから」と言われた通り、福島県内からの参加者は1人。講習会を1度開いただけで何かができるとは思っていませんでした。でも、自分が今できることをしておきたかった。講習会に来て下さった全ての方に感謝しつつ、何か1つでも持って帰ってもらえるよう最大限の心配りをして過ごした2日間。研修の仕事の原点に立ち返った思いがしました。

岡田 隆介

最近、「エビジェネティクス」なるものについての知る機会があった。これま

での2度は関心を引かなかったが、今回は三度目の正直にして三度目の衝撃。振り返れば、自分は10年ごとにこの種の体験をしている。最初は20年くらい前の「システム論」、二度目は約10年前の「EMDR」だった。

で、エビジェネティクスの話。これまで遺伝子は「自分を複製するという生命の究極の目標のために、すべてのことは最適化され、生物は適応的に進化してきた」(R.ドーキンス)とされ、獲得形質の遺伝は分子生物学的メカニズムに基づいて否定されてきた。ところが、遺伝子の働きはもっと自由自在だという見方に変わりつつあるという。つまり、「親が獲得した形質が子孫に伝わることもありうる」と。草葉の陰でダーウィンやメンデルは慌てふためき、逆にルイセンコはガッツポーズをしているかも。

養育期の環境がその後成体になっても遺伝子上に「記憶」されるなら、幼少期の環境ストレスによる遺伝子の発現変化がストレス脆弱性を形成し、その後何らかのストレスが引き金となって疾患や虐待を“発症”させるとの説明も可能になる。そういえばWSJに、「子どもの頃に受けた虐待のDNAに及ぼす影響」が米デューク大・チューレン大で研究報告されたとあった。

こども虐待のエビジェネティックな説明、これはたいへんな切り口になるかもしれない。

竹中 尚文

浄土真宗本願寺派専光寺住職

私のお気に入りの曲に“オーバー・ザ・レインボー”がある。最近はジェフ・ベック演奏をよく聴いている。イズラエル・カマカヴィヴォオレの演奏も気に入っている。映画「小説家を見つけたら」のエンディングに流れたのが、イズの“オーバー・ザ・レインボー”だった。はるか虹の彼方にたどり着くのは大変である。26歳の時に初めて失恋をした。その帰り道、夜道の人通りの少ない所で錆びたフェンスにかき付くようにして泣いた。愚かで幼かった私に訪れた当然

の結果であったが、ひどく落ち込んだ。しかし、今から思えば自分史の中の一ページであった。それからの人生で出くわすことを思うと、ほんの序章であった。倒れ込んでから再び歩み始めたことは、人生においていい経験となった。倒れたら立ち上がればよい。立ち上がると、新たな自分に出会える。新たな自分に恐れてはいけない。今、私は奈落に突き落とされた人の傍に立つことが多い。その人が笑顔を取り戻すなど果てしない彼方のように思えることもある。虹の向こうにたどり着くには果てしないような思いである。その人が再び立ち上がって、歩み始めるのに立ち会える時、私はその場に居合わせたことを心よりよかったと思う。人は、再び立ち上がるのは同じ場所に立っているのではない。気が付いたときには、虹の彼方にいるのである。それを仏教では「回心(えしん)」という。

川崎 二三彦

スマホ騒動と学会理事

2008年4月に買い換えた携帯電話のことだ。ある日突然、画面が真っ黒になった。一瞬電池切れかと思ったけれど、充電したばかりだからそんなはずはない。もう一度確かめると、今度はちゃんと表示される。どうやら寿命、もしくは故障らしい。が、携帯電話はもはや一時も手放せないから修理するなんて論外。取るものも取り敢えずドコモショップに出かけてみた。

「機種変更したいんです」

「ありがとうございます！ 只今1時間待ちですが……」

むろん、選択の余地はない。待ち時間を利用してビールとともに夕食を済ませ、戻った途端、

「19番でお待ちのお客様……」

ちょうど案内の声がした。スマホに切り替えることとして、一杯機嫌であれこれ質問し、注文し、にこやかに対応してくれた女性の説明をいかにも理解している風な顔をして聞いてるうち、かれこれ1時間半ぐらいは費やしただろうか。最後は意気揚々と引き上げた。

のはよかったとして、直後にハブニング。説明書や充電器などの付属品一式を入れた手提げ袋を電車に忘れてしまったのだ。幸い新品のスマホだけは鞆に納めていたから無事だったものの、充電できないからせっかく買ったのに操作できない。

ただし、捨てる呆けあれば拾う車掌あり。翌朝すぐJRに電話すると、遺失物は千葉県君津駅まで運ばれ、そこで奇跡的に確保されていたのであった。

「フフフ」

と思わず破顔、早速郵送してもらう手筈を整えたものの、スマホは直ちに使用したいから、夕方再度ドコモショップに出かけて2個目の充電器を買った。



「いやあ、昨日買った充電器を電車に忘れてしまいましたね」

2日続けて買い物をするので、照れ隠しについつい余計なことも言わなければならない。それを聞き流すスタッフの心中は知るべくもないが、対応はあくまでも愛想良いのであった。

「この袋、今日は忘れやしないぞ！」

慎重にも慎重を期して充電器入りの手提げ袋をしっかり掴み、片方の手で愛用鞆の持ち手を握りしめる。こうしてショップを後にし、戸外に出てしばらく歩いていると、どうにも肌寒い。が、それもそのはず道理も道理。手荷物に集中するあまり、はたと気づくとさっきまで羽織っていたはずのコートを置き忘れていたのである。慌ててショップに戻ると、

「お客様、こちらでしょうか」

*

というような「呆け日誌的近況」を、期せずして本プロフィール欄に毎回のよう書き続けているのを知ってか知

らずでか、過日舞い込んだ、差出人「対人援助学会」からの手紙には喫驚した。

「対人援助学会会員投票による理事選挙におきまして、先生が理事に選出されましたことをご通知申し上げます」

「な、なんだこれは？」

選挙があったことすら記憶になかった私は、開封一読、思わず素っ頓狂な声をあげてしまった。

そもそも私が本学会に入会するきっかけは、本誌編集長氏からのメールだ。

「このたび、又新しいことを始めようと思っています。あなたはどんどん多忙なことと思いますので、無理にとは言いません。でも、是非誘いたいと思ったのでお知らせしておきます。ご検討下さい」

見ると、メールの後段に本マガジンの企画案が添付されている。「季刊連載誌」「原稿料は出せません」とあって、「1回の原稿4頁、あるいはそれ以上」なんて規格も書かれていたけれど、とてもそんなことは無理。でも「最も短い連載」を売りにするならそれも趣向だろう、と思いついて2頁限定で書くことにしたのが、現在連載中の「映画の中の子どもたち」である。ところで編集長氏、

「連載するんだったら学会に入らないとあかんのや」

「学会費を払うんですね」

「そうそう」

「ウウム、原稿料を自分で払って連載するってわけか」

というようなことで私、連載執筆の条件を満たすべく、皆様の後塵を拝してどうかこうにか学会員に相成った次第。そんな私を、また、呆け日誌のネタが尽きないような私を理事にして、この学会は大丈夫なんですか……。

鶴谷 圭一

幼稚園の公式ツイッターをはじめて1年以上になります。ツイッターを始めたらホームページの更新がめっきり減りました。

園外保育や遠足に行くときは、僕は園長兼カメラマンとして同行します。少な

くても300枚、多い時で800枚くらい撮影しますが、これにツイッターの投稿作業が加わりまして、家で見ているお母さん方には好評ですが、こちらはカメラにiphoneにと大忙しで子どもと関わる時間はほとんど無くなりました。

最近の園外保育では、子どもたちに「カメラマン」と呼ばれております。園内にいると園長と呼ぶのにね。

<http://www.haramachi-ki.jp>

メール：osakana@haramachi-ki.jp

ツイッター：haramachikinder

河岸 由里子

北海道 かうんせりんぐるうむ かかし 主宰（臨床心理士）

先日古くからの友達との食事が二度ほどあった。メンバーは違うのだが、どっちの会でも年のせいもあって、話題はどうしても健康や親の介護の話になった。その中で、娘である自分と実の母親との関係がぎくしゃくしているとの話があった。実母が相当な年齢になって、多少痴呆も入っているのかもしれないが、娘に対し、とても攻撃的で、きついことや嫌なことはばかり言うてくるそうだ。例えば、まだ、しっかりしていると思っている実母に対し、娘として「もう年なんだから、私に頼めばいいのに・・・。」と言えば「あんたなんかの世話にはならない！」と返ってくる。「なんかって何！」こうした、ちょっとした言葉に、「カチン」とくるので、喧嘩になってしまうそうだ。姑の世話でこういう喧嘩になるよりは良いのだろうが、「いっその事もっとボケてくれれば」とさえ思ってしまうとのこと。痴呆が進めば下の世話や徘徊の心配など、それはそれで大変だとはわかっているのだから、ただ単に目の前の面倒くささから逃れたいという意味だろう。この手の話を他の場所でも度々聞くようになった。実の親子なのだと思うってしまう。

私は40歳になる前に母も父も続けて亡くした。母親には痴呆があって最後の方は大変だったが、友人の母親たちとは違い、文句や嫌なこと、きついことを

言うてくることは無かった。静かで、むしろ鬱っぽかったと言える。とても賢い母だったので、上手だった書や絵が下手になって行くことがとても悲しかった。母が亡くなった後、4か月で父も心筋梗塞で割合あっさり逝ってしまった。最後に残っていた父方祖母は父の死後わずか3週間で亡くなった。こうしてみると、私の両親は子ども孝行というか、子どもにとって良い人たちだったと言える。有難いことだ。

前述の友達たちと、「自分たちは子どもに迷惑を掛けないようにしよう、その為には健康維持、ボケ防止、そして最悪入所先の準備をしておこう。」という結論に至った。そうは言っても、皆まだ10年は大丈夫と思っている。甘いかな？

中村 周平

先日、小学校からの友人が結婚しました。電信棒で頭部を強打したのが偶然にも彼の自宅前で、親御さんに助けていただいたことがご縁で仲良くなるという変わった関係です（笑）。中学・高校も同じ学校に進学し、グラウンドで一緒に汗を流したラグビー部仲間でもあります。二次会で彼の幸せそうな姿を見て自分までニヤニヤしてしまいました。

また、その日は事故が起きたという自分にとってある意味「特別な日」でした。それが来年からは大切な友人の結婚記念日という「特別な日」になったわけです。自分たちを出会わせてくれたのも偶然、今回も本当に偶然。でもそれが自分にはすごく嬉しい偶然ばかりでした。

北村 真也

私塾「アウラ学びの森」

（<http://auranomori.com>）代表。

私塾「アウラ学びの森」

（<http://auranomori.com>）フリースクール

「知誠館」（<http://tiseikan.com>）代表。

10月に福島県三春町を訪れました。お世話になった武藤義男先生の十三回忌にお線香を上げに行きたかったのです。武藤先生は80年から90年にかけて三春の教育長を務められ、当時、町を

あげて教育改革を实践された方です。私が先生に出会ったのは95年頃かと思うのですが、お亡くなりになられるまでの短い期間にさまざまなやり取りをさせていただきました。「官と民の垣根を越えるいい仕事をしてください」それが、先生に頂いた最後のコトバでした。あれから13年、アウラは、文科省をはじめ三つの行政のプロジェクトに微力ながらかかわっています。今回はそんな報告を先生の墓前にさせていただきます。

荒木 晃子

おもえば、今年はギアを入れ替え、走り抜けた一年だった。

元旦に届いた「母一時危篤」の一報が、私の年間スケジュールを決定したといってもいい。とにかく、一命を取り留めた母に、いつ・なにが起きてても対応できるように、できるだけ、まわりの方にご迷惑をかけぬようにと、対外スケジュールを組んだ。極力、遠方での学会発表や勉強会への参加を避けるようにし、もし病院から連絡があれば即駆けつけることができるよう、できる限りの体制を整えた。前年度から持ち越した国際会議の開催と、新規に依頼のあった業務を滞りなく終え、継続業務には支障が出ることはないよう準備を整え、身近な仲間に

“いざ”という時の対応をお願いした。常時、携帯電話の着信を気にしつつ日々を送ることは、思った以上に疲れを伴う。最終的には、この冬を迎える直前に、体力・精神力の限界を感じ、思いとは裏腹に大切にしていた業務からしばし距離を置くしか術が見つからなかった。

常に両手いっぱい大切なものを抱えていることで、非常時の対応にもろもろの不安があった。自分はそんな器用な人間ではないことくらい自覚していたし、それ以上に気がかりなのは、母にその時が訪れたとき、自分がどんな状態になるのか見当がつかないことだった。もちろん、その時がこない限り予想がつくわけがない。以前、父を看取った時には、母と共に悲しみを分かち合えた。でも、

つぎは、その母を私がひとりで看取らねばならない。いまいえることは、それは、とてつもなく悲しいだろうということだけだ。

こうやって、母をおもいながらものを書く機会が、あとどれくらいあるのかわからない。でも、いま、私がおもいを寄せる母は、間違いなく生きている。こうやって、母の安否を気遣いながらつづる文章に、物言えぬ母との思い出を紡ぎ続けているのかもしれない。点滴だけでいのちを維持する母の頑張り、いまの私にとって、一番の励みである。つぎのお正月で、母の頑張りは二年目を迎える。ありがとう、おかあさん。

尾上 明代

少し前に、映画「ツナグ」を見ました。ものすごく忙しい中、無理してでも見たかった映画でした。

すでに亡くなった誰かと会わせてくれる、特別な能力をもつ「ツナグ」。いろんな事情で「死者と会いたい人」が登場します。

映画の主人公自身(これから「ツナグ」の職業を祖母から引き継ぐ男の子)は、謎の死をとげた両親に「会わない」ことを決め、その死を受け入れ自力で乗り越えました。

彼の成長が素晴らしかったのと同時に、悩んでいる人を助ける仕事をする人にとって、(当然ですが)「自分が自分を助けることができるように」成長することが必須である、というメッセージを強く感じました。

木村 晃子

今年を振り返る時期になりました。今年、実に多くの出会いがありました。それも、全くの新しい出会いとも違い、これまで自分が大切にしてきたことの延長に、人との出会いや、新しい活動との出会いがありました。こういうのが、巡りあわせというのかな、と感じています。タイミングです。今、この時に、この人に、こんな仕事に巡りあわせる。そのことが、その後の歩みに大きく良い循

環を引き寄せてくれた、そんな一年だったように思います。この2年ほど、私の人生は停滞の時期でした。それでも、歩みをやめない限りは、復活するのだと実感しました。どんなに状況が辛くても、そんな辛さの中にも、時々温かな光も差し込んでいたりして。何もかも真っ暗闇にしてしまうこともないのだと思います。もしも、この私の短信部分を偶然に目にされた方が、ちょっと低迷だったとして、私に差し込んだ光が、言の葉にのって届くといいなと思います。今あることに感謝して。

北海道 当別町 普段はケアマネジャーとして高齢者支援をしています。

団 遊

新幹線の中で書いています。生まれ育った福知山に行っていました。実際に住んでいたのは小学校2年生までなのですが、三十年振りに行ってみて、「ここは故郷だ」と思いました。父親の転勤の経由地ですから、今は特に尋ねるべきところもありません。けれど、当時住んでいた長家を見た時は、感傷的になりました。通学路を歩きながら「よくこんな長い道を毎日通っていたな」と過日の私に感心しました。

駅では傘を持って改札口で父親を待った記憶がよみがえりました。幼少期の記憶は、場所に宿るのだと強く思いました。京都府内ではありますが、転勤を繰り返した父でしたから、自分には「ふるさとなどない」と思っていました。一番長く住んだ滋賀県大津市にも、特に思い入れはありません。

でもそれは間違いでした。幼少期を過ごす場所というのは、これほどまでに大事なモノなのかと思いました。これから「故郷は？」と聞かれたら、胸を張って答えます。「福知山です」。

藤 信子

私の住んでいる団地は樹が多く、夏は木陰の恩恵を受けているが、秋の紅葉はまた素晴らしい。樺並木の色づきから始まり、銀杏が周囲を明るくする様子、そ

して今は紅葉の真っ赤になったものから、緑・黄色・赤のグラデーションを見せるものまでを楽しんでいる。この団地の様子を知っている人からは「よそに行かなくてもよいでしょう」と言われることがある。そんな時、ちょっと戸惑う。確かに黄葉・紅葉を楽しんでいるけれど、それは日常の中だから、「紅葉を見に行く」とはちょっと違うような気もする。紅葉狩りに出かけるというのは、非日常の時間・空間の中に自分をおいてみることで、異なった体験ができることなのではないだろうか。しかし1日に万を越す人が集まるところには行きたくはない。今年の紅葉は久しぶりに鮮やかで美しいと言われている。歩いて行けて人の少ないところはどこだろうと、残り少ない日にちの中で考えている。

水野 スウ

ガジンが更新されるのは年があけてからでしょうから、だいが前の話になってしまふけれど。

9月末、同志社大学で開かれた、早樫さんの「二日間 家族造形法ざんまい」の研修会に、初参加しました。私はまったくの新米なので、ざんまいの域まではとてもたどりつけませんが、マガジン誌上でお名前や文章を拝見してる、早樫さんをはじめ、何人かの方たちと京都で初めてお会いできたのが、とてもうれしい収穫でした。

今回の連載や短信を目にする時、その方たちのお顔を思い浮かべながら読むことができます。本体がウェブマガジンなだけによけい、実際に会う、言葉を交わす、その人の全体からかもされる空気にふれる、といった京都での体験が、新鮮に感じられました。これからもチャンスと予定があれば、えいやっと、出かけたいなと思います。

「紅茶の時間」4冊目のエッセイ集、『紅茶なきもち～コミュニケーションを巡る物語』が12月半ばに発売開始。このマガジンに連載中の文章が、いくつかの出发点になってくれたこと、この場をお借りしてあらためて、ありがとうご

ざいます、と言わせてくださいね。

仲間と一緒に子育てしたい、からはじまった紅茶の時間。その場を続けていくうちにクッキングハウスとも出逢い、コミュニケーションを練習するあらたな場、「ともの時間」が生まれ、そこから気づいたいろんなきもちやたくさんの学びが、巡り巡って、私の中に、とてもゆるやかに還っていつているような気がしています。

私自身のきもちの循環や、いつか誰かの役にたちそうなコミュニケーションのヒントが、読んでくださる方にどうか伝わりますように、と願いながら一年がかりで、文章を綴ってきました。他に、紅茶の原点となった私の居場所の話や、目には見えないギフト、奇跡みたいな日常、私のこころの旅の話、なども。編集とデザインは、『ほめ言葉のシャワー』と同じく、娘の mai works が担当しています。

『紅茶なきもち～

コミュニケーションを巡る物語』

著：水野スウ 編集・装丁：mai works

発行元：mai works

四六版（127mm×188mm）200ページ

¥1,200（税込）

一般の本屋さんには並ばない、産地直送の本です。ちなみに、送料は一冊につき、160円。もしご希望の方、いらっしゃいましたら、sue-miz@nifty.com までどうぞご連絡くださいませ。

「紅茶の時間」URL

<http://www12.ocn.ne.jp/~mimia/sue.htm>

山本 菜穂子

最近の感動をふたつ。一つは映画「のぼうの城」。大事なものは何か、何を守ることがか、ぶれない生き方がしたいな。もう一つは YouTube の映像「裸の男とリーダーシップ」。「ほほえみ」においては、私は「裸の男」なのかも。最初のフォロワーであるほほえみ隊に感謝。

早樫 一男

9月～11月の三か月、慌ただしい日々

を過ごしました。スケジュール帳に記入した予定や約束を順調にこなせたことに感謝です。

連載中の家族造形法に関しては、定例の研修会だけでなく、京都(9月29日～30日)、札幌(10月20日～21日)、金沢(11月3日)と、それぞれのワークショップで紹介することができました。出会った方々にも感謝です。

予定を順調にこなしていくには、健康管理・体調管理が重要ということで、「スポーツジム」通いを思いつきました。10月初旬、入会手続きの前の「体験」に参加。「まずは、運動不足解消！」と意気込んだものの、予想通り？「体験」としての一日だけで頓挫という結果となりました。

11月に入ってから、毎日3～40分、距離にして2～3キロ歩いています。時間は朝7時前後。ただし、室内です。通販で買ったフィットネス器具を使っています。脂肪燃焼と高血圧の予防を目指して、細々と続けたいと考えている昨今ですが、問題は「いつまで続くか」です。

西川 友里

いくつかの学校で、福祉系対人援助職の養成にたずさわっています。

この原稿の入稿は11月。11月は、どの学校でも学園祭が行われます。

私は学生の時から、学園祭が大好きです。学園祭が、というよりも、それに到達するまでの準備の時間が大好きです。教員になってからの学園祭は、少し立場は変わるものの、やっぱりワクワクするものです。

「誰かを楽しませるためには、どうしたらいいかな」と考えて、話し合い、考えあい、やってみて、失敗して、やり直して、また意見を交換する。その間に多くの人の思いが錯綜し、現実的な制約にたくさん気付き、他人と意見があわないままのこともあると知り、感情に走って大失敗をし、何にも言えずに自己嫌悪に陥り、誰かを意図せず傷つけることもあると知り、それでも話が通じる工夫をすれば、それはそれでなんとかなると知り、やっとの思いで学園祭当日を迎える。そ

うやってこの機会を活かして、成長をしていく学生達。サイコーじゃないですか！学生によっては、下手な授業より多くのものを吸収し、一回り大きくなります。

というわけで、誰もやりたがらない学園祭委員の顧問を、アホみたいに毎年志願してやっています。こういうの、物好きって言うんでしょうかね。気にしませんけど。今年の学園祭、3日前に終わりました。今年も、サイコーに楽しかったです！

中島 弘美

大阪梅田にある個人開業のカウンセリングオフィスで、家族療法をベースに子どもと家族やカップルの支援をしています。

公的な機関に勤めておられる方から、事例検討をしてほしいという要望があります。子どもの事例が多いのが、安全が疑われる虐待のケースについての依頼です。

いまおすすめしているのは、「三つの家(情報収集ツール)」をつかったのグループ事例検討法です。これは、家族療法のひとつであるソリューションフォーカストアプローチの理論に基づいて、シンプルにまとめられています。それに、利点も多々あります。ケースでおこっている状況をバランスよく把握できます。視覚的にも工夫がされていて、ノウハウも伝えやすく、ケースの整理にも役立ちます。

この事例検討研修をしていて気がついたこと。それは、「新しいやり方を取り入れるのがうまい」そんな職員さんが多くいることです。しかも女性にその傾向があるようです。

「検討を必要としている家族の、心配なこと(=心配の家)と、なんとかやれているところ、うまくできている点(=安心の家)を記入してください」と、説明するとポイントを瞬時にくみとって、短時間でさくさくっと書き込み、グループワークをこなすことができます。

情報を整理するときのものさしをすでに持っておられるのだろうと感心します。

私はカウンセリングをしているとき、受けとめることの幅は、それなりにしていると思いますが、反対にこちらから発信する、伝えることについては、本当に届いているかどうか、確信を得にくいときがあります。そのため、研修講師をしていて、私の意図していることが伝わたと手ごたえがあるとき、とても安堵します。

千葉 晃央

平和を願う資料館をつくり平和学習、反戦活動を続けてきた方、関東で働いていたけれども沖縄に移り住み辺野古で座り込みをしている方、オスプレイ離発着場が地元でできることになり、急に巻き込まれ米軍基地出入り口を封鎖している方、沖縄の方と結婚し、沖縄平和ガイドとして沖縄の戦跡を案内されている方、京都西陣で修業をして現在は沖縄伊江島に移り、自ら宿の建築をして経営されている方...そんな方々に沖縄平和反戦研修を経験しました。京都の福祉事業所のスタッフの方々が毎年実施してこられ、今回6年目の研修でした。沖縄では生きていく人にも当然お会いしましたが、多くの今は亡き方々にもお目にかかってきたような気がしてなりません。辺野古で上陸艇6機による訓練を見て、那覇空港を横切る戦闘機を見て、沖縄高速の上を飛んで行ったオスプレイをみる。その一方で雄大な自然が沖縄にはあります。またオスプレイが担う任務をしてきた前任機はベトナム戦争のころから使っている輸送機であって、それがいまだに飛んでいることも危ない！というはなしをきくと一面的な見方ができないことだけが事実としてあるような気がします。

沖縄も原発も社会的弱者の上に成り立っていることだけが身にしみます。それが私たちが作っている社会です。自分が社会的弱者に関わる仕事をしているものとして、そして教員として、やるべ

きことがあるようにあらためて感じました。



辺野古 女性米兵の姿も



地中あちこちに眠る不発弾 白い大きなものは模擬原爆 投下訓練も沖縄でヌチドゥタカラの家(命はたからの家) 伊江島



沖縄自動車道上空を飛ぶオスプレイ 1トンの模擬貨物で訓練中

三野 宏治

群馬に来て7か月が経ちます。仕事で

東京や埼玉にでかけることがあります。また今年は調査で熊本へ行ったり、帰省で群馬と大阪・京都を車で往復すること数回。以前の生活では考えられないくらいの距離を移動し、様々な場所を訪ねています。

ただ、仕事・調査で行く場合、滞在時間が限られていることもあり、何を見るわけでも、何を食うわけでもなく帰っています。何を見て何を食えばよいのか、名所や名物を知らないし積極的に知りたいと思わないのが主たる原因と思われる。

浦田雅夫

最近、いろいろなイベントの裏方をよくさせてもらっています。人に来ていただくにはどうしたらよいのか。対象者のニーズになっているか。主催者のニーズではないだろうか。ニーズの把握が大切だなと再認識させられます。いよいよ寒い季節になります。皆様、おからだいっそう大切になさってください。

中村 正

京都と大阪で仕事をしていた連れ合いが仕事先を変えるという。以前から話しはでていたのだが、本決まりになった。アラブ首長国連邦(UAE)にいくという。日本語教育学が専門で、日本語を教えにいく。年明け早々の2月から予定は3年間である。「・・・7つの首長国により構成される連邦国家である。メソポタミア文明とインダス文明との海上交易の中継地点として栄えた・・・世襲の首長による絶対君主制に基づき統治されている。・・・石油の富によって成り立つ、つまり国民の労働とその結果である税金に拠らずして国家財政を成立させる典型的なレントリア国家・・・国民の政治への発言力も発言意欲も非常に小さい。・・・UAE国籍を持つ国民はゆりかごから墓場までの手厚い政府の保護を受けている。・・・UAE全住民に対する国民の割合が20%に過ぎない・・・」などとウィキペディアにでている。なかなか理解しにくい、興味津々である。我が家は10年に一度くらいは一家離散状況となる。この前は2003年から2

004年にかけてシドニーに滞在していた。団編集長らに遊びに来てもらったことがある。その時は子どもが小学6年だったので行き来したり、シドニーの学校を確保したりしたが、今回は連れ合いの単身赴任になりそうだ。でも時々私もアブダビに行くことにしよう。ワールドワイドの視野と行動力をもつ連れ合いから教えられることは多いが、今回の赴任先は想定外であった。成人した娘と日本で父子生活となる。

サトウタツヤ

前回、「今回からは、福島のことなどを書いてみたい。なるべく長く色々」と宣言したことなどすっかり忘れて、時間とは何か、を書き始めていたが、やはり福島のことを書こう、と思い直した。前回の続きではないが、最新の福島。最近、二ヶ月に一度は福島に行っている。昔の同僚にも会う機会が増えた。同行している学生たちも何か得ているようだ。

大野 睦

ネイチャーガイド 有限会社ネイティブビジョン 代表取締役 屋久島青年会議所 副理事長 BLOG やくしまに暮らして <http://mutsumi-ohno.seesaa.net/>

2012年も終わりが近づいてきました。今年ほど全速力で駆け抜けた年はなかったかもしれないなあと思いつつ振り返ってありました。皆様にとって屋久島の景色がホッと一息、気分転換になることを願いつつ、あと一ヶ月、悔いのないように走り続けたいと思う今日此頃です。

坊 隆史

同僚たちに誘われて京都の愛宕山に登った。標高が924mと京都市内から目立っていたため、以前から興味もっていた。山頂付近からは視界に収まった京都市街を一望することができた。普段アウトドアに接することが少ないためいい機会であった。聞くところによると、片道2時間近くかかる山を毎日登っている人もいるらしい。同僚の一人も月に

数回は登っているらしく、嫌なことがあれば登山をしてセルフケアに励んでいくとのこと。確かにわかる気がした。初心者にはほどよい難易度で、登頂した時の達成感もある。正の強化がはたらき、また別の山に挑戦したくなった。登山療法として援助活動に使えないだろうか、と登山の時まで対人援助のことを考えてしまった自分にもセルフケアが必要かもしれない。

松本 健輔

カウンセリングルーム

HummingBird 主宰 主宰

<http://www.hummingbird-cr.com>

夫婦のカウンセリングをしていると本当によくこんな相談に出会う。妻が子どもの教育(勉強やスポーツ)に熱心になり、夫との関係が悪化。妻は子どもへの関心が薄いと夫を罵倒。夫は子どものためじゃなくてお前の押しつけだと非難。

カウンセラーという中立の立場としてどちらが正しいとは言える立場にはないが、『その行為が誰のためのものなのか』を考えることはとても大切なことだが、夫婦で共通の認識を持つことはなかなか難しいと最近切実に感じる。

岡崎 正明

うちの地域で、このたび集会所の建て替えが議論となった。高度成長期後半に造成された古い住宅地。年々住民も建物も高齢化が目立つ。今の集会所は耐震化なんて言葉が生まれる前の産物で、築30年は越えている。

「助成金が出る今のうちに建て替えるべき」「急がず修繕しながら使えばいい」どちらの主張にもそれなりの理由があった。私は答えが出ず、初めてまともに議論の場に参加してみた。

会場の9割はいわゆる高齢者と呼ばれる年齢層の方々。しかし元気だ。この地域を作ってきた自負と気概を感じる。かといって一部の人が独断で、ということもなく、話し合いも大変民主的で、検討の材料となる情報(予想される負担や

建設候補地等)も可能な限り提供された。

議論は白熱し脱線もしたが、最後は多数決となった。

結果は今すぐの建て替えはしないことに。しかしほとんど意見は半々。それだけに微妙な空気が流れた。

私はちょっと勇気を出して手を挙げた。「みなさんが自分のことだけ考えるのではなく、地域にとっていいことは何かを真剣に考えておられるのを聞いて、ここに住んでよかったと思いました。ありがとうございました」

拍手があがった。会場の空気が少しゆるんだようだった。

もちろん本心からの発言だった。どっかの国みたく、一部の人間が決めたことが、ものすごいスピードで進んでいくというのは、なんだか危なっかしい。それなら例えなかなか物事が決まらなくても、いろんな意見が自由に表明できる方が健全な気がする。本屋でゴーマニズム宣言の横に日教組の本が並んでいるのが嬉しくなる性質なのだ。それが生き物の多様性ってもんだって。

ただ、それを効果的な場面で「狙って」言えたことについては、自分をちょっと褒めてやりたくなった。こんなのが面接場面で出せれば、なお良いのだが。

牛若 孝治

私のように、視覚に障害があり、白杖を携帯していると、外出先や交通期間内で、こんな会話をすることがある。

A「私(僕・俺)の家族にも、障害者がいるから、あんたの気持ちわかる」

私「そんなこと軽々しく言うもんじゃありませんよ。第一、障碍っていても、どこの障碍かわからんでしょ。あんたは善意のつもりで言っているだろうが、それを聞いた俺は嫌な気分です」

A(きょんとんとして)「ええ。そうなんですか?でもほんとにわかるんです」

私「それは、相手のことをわかったつもりになっているだけで、あんたの思いをただ相手にぶつただけの押し付けがましい野蛮な態度ですよ」

私はあけっぴろげな人間だから、どん

なに大勢の人がいても、怒るときは体を張って大声で怒る。障害者だから怒らないだろうという、なんの根拠もない悪しき思い込みを払拭させるのが私の役目であるから、どんな好奇心で見られようと、私はこれからも怒り続ける。そして私は、そのようにして怒っている自己を愛している。

袴田 洋子

今回の「援助職のリカバリー」を書くのは、けっこうしんどい作業でした。理由は、「援助職」になってからの話だからだろうと思います。

これまでは高校、大学、と、プロになる前の話、でもプロになってからのダメダメぶりを振り返るのは、かなりイタイ作業でした（苦笑）

でも、時々イタイ思いをするくらいが自分にはちょうどよいかもかもしれません。どうぞ、お読みいただけたら幸いです。私ほどのダメダメ援助職は居ないかもしれないと思いつつ、昔の私のような若いスタッフを育て中の方がいらしたら、どうか、ひとつでも良いところを見つけて、認めてあげて、褒めてあげて頂きたいと思う所存です。

生意気言って申し訳ありません。

乾 明紀

もう10年以上も馬券を買ってないが、日曜日、深夜のニュース番組で競馬のジャパンカップを観た。番組では、三冠馬と三冠牝馬が競う史上初のレースになったことを熱心に伝えていたので、どうせ煽りだと高を括っていたら、豈図らんや素晴らしいレースを見せてもらった。最後の直線、残り400メートルを切った時、前方進路を塞がれた三冠牝馬が、フランス凱旋門賞二着の牝の三冠馬に体当たりしながら進路を確保し、その後は三冠同士が並走しての叩きあい。人馬一体となった文字どおりの一騎打ちとなった。どっちが勝ってもおかしくない一騎打ちを制したのは体当たりを

して進路を切り開いた三冠牝馬だった。興味のある方は、JRAのWEBサイトでどうぞ。久しぶりに淀の競馬場に行こうかな。。。

國友 万裕

この頃、アラフォーに続いて、アラフィーという言葉が流布し始めました。アラフィーとは、around fifty、すなわち、50歳くらいの人という意味なのだそうです。僕は、最初、アラフィーとは、「あら、気が付いたら、50歳」という意味なのかと思っていました（笑）。僕もアラフィーです。1964年の2月生まれなので、後1年ちょっとで50歳になります。

考えてみると、僕は、50歳にふさわしいものを何も持っていません。僕が20歳の頃、50歳の男と言えば、妻をもち、子供をもち、家を建て、社会的地位も勝ち得た男性というイメージがありました。僕が20歳の頃は、まだ景気がよかったし、普通に生きていけば、自動的にそうなるのだと思っていたような気がします。

しかし、実際アラフィーになってみて、イメージしていたものを何も持っていない自分に気がつきます。僕は、パートナーもいないし、仕事は非常勤だし、貯金もありません。もっとも、僕が20歳の時に比べると社会そのものも変わってしまい、真面目に生きていてもリストラになったり、過労死したり、自殺したりするアラフィー男性は山のようにいますし、離婚が増えているので、アラフィーでシングルという人は珍しくもありません。それに僕は、今の自分の生活がそれほど不幸だとは思っていないし、もっと自信をもってもいいのですが、やはり何も得られなかった自分が何となく惨めに感じる時はたびたびです。まだまだ男は仕事で成功して、妻子を養ってなんぼという価値観を持っている人は多いです、僕も無意識のうちにそういう価値観を内面化しているでしょう。

僕は、少年の頃に重い十字架を背負い、

今でもそれを完全に下ろすことはできません。しかし、今年は、新たな友達もでき、仲間と温泉に行き、海水浴に行き、キャッチボールをし……少しずつ、少年時代に失ったものを取り戻しています。

DV 被害者あさみまさんの『いつか愛せる』はとても素晴らしい本ですが、僕も、いつか少年時代を取り戻せる、いつか十字架を下ろせる、いつか僕を傷つけた人を許せる……そう思って、日々を生きていきたいと思います。

脇野千恵

先日、地域にある薬物依存からの回復施設「ダルク」の10周年フォーラムに参加しました。このような施設は全国的に広がっていて、女性のための「ダルク」もできています。基本的には当事者だった人が施設長となり、入所者を回復させていくプログラムを実施していますが、入所するには、地域から遠く離れることが求められます。大抵は、親がわが子を手放すことに躊躇するそうです。会場には、全国から祝いに駆け付けた当事者、その家族が大勢いました。ちょっと強面の男性たちと、いかにも家族の問題に闘い続けてきた、いや今も闘い続けている家族の姿があり、考えさせられました。午前中はそういった家族の体験話。本場に重い重い話でした。

これから、薬物依存症はアディクションあるいは嗜癖というそうで、昨今の依存症は実に様々で、買い物、ギャンブル、ゲームなどなど複雑になっているとか。精神科医、弁護士、牧師、行政の福祉協会の職員のシンポジウムは、それぞれの立場での提言が面白いものでした。弁護士のパネラーは、「こういった場所に裁判官を呼べるといい。いつも被告に対して、なぜやめられないのか、反省しているのかといった質問ばかりする。ここに来て家族や当事者のことを知れば、心ある裁判官や検事は、もっと人間らしい質問をすることができるのに」と。精神科医は、「臨床医は当事者の話を聞かず、

薬で治そうとする。薬物依存について学んでこなかった医者だから仕方がないが」と。パネラーに教育者がいなかったことが残念でした。

団 士郎

2012年、秋の東北巡業はむつ市、仙台市、多賀城市、大船渡市、二本松市、福島市の六都市になった。各所で様々な形でパネル漫画展をやった。



(大船渡市会場)

加えて、埼玉の文教大学内で漫画パネル約十点が二ヶ月余り展示された。夏にはウイングス京都で、被災地からの避難者支援プロジェクトの一環としての展覧会もやった。

一〇年やる計画なので、来年も又秋から巡回が始まることになる。昨年、スタートしたときは、どうなることかと思ひ、どんな意味が生み出せるだろうかと思案中だった部分があった。しかし二年目を終えて、今まで明確には見えていなかったモノが、くっきりとしてきた感じがある。

一週間余りのギャラリー展示空間は、イベント講演会や貸し画廊展示とは、まったく違った場になることが、よく分かった。



(津波被災後、そのままの100円shop)

けっして多くの観客が、そろそろ見に来るわけではない。ポツリポツリだと言っていい。その人達が、立ち止まり、受け取った冊子に目をやり、またパネルに眼差しを戻す。



(二本松市会場)

それをその場においてアテンドしてくれるスタッフがいる。ここに生まれる一期一会の空気が何かを生みだす。

単純化しては語り難い思いが、たくさん漂う被災地において、巡り合わせで関わることになった人々の、新たな物語が助走し始めている。

